

追手門学院大学
心理学部紀要第19巻抜刷
2025年3月1日発行

論文

夢の内容の量的研究に関する文献展望
－研究法，わかっていること，日本人の夢－

木村 大樹

Review on Quantitative Studies of Dream Content:
Methods, Findings, and Japanese Dreams

Daiki KIMURA

論 文

夢の内容の量的研究に関する文献展望
－研究法, わかっていること, 日本人の夢－

木村 大樹*

Review on Quantitative Studies of Dream Content:
Methods, Findings, and Japanese Dreams

Daiki KIMURA

要 約

本稿は夢内容の量的研究について, その研究方法と知見をレビューし, 日本人の夢に関する研究を整理したものである。夢内容の量的研究は1960年代に始まり, 「Hall & Van de Castleシステム (HVdC)」が信頼性の高い分析手法として発展した。夢は「無意識への王道」として臨床的にも重視されるが, 本稿は臨床の利用ではなく, 夢内容そのものの数量的研究に焦点を当てる。まずは調査で用いられる睡眠実験室での誘発覚醒法や夢日記などについて, それぞれの利点と課題を議論した。次に, 夢の量的研究が明らかにしてきた夢の一般的特徴, 性差, 年齢差, 文化差などを概観した。日本人の夢の特徴としては, 知っている人が多く登場し, 攻撃的内容が少ない点が挙げられるものの, 日本における基礎研究は停滞しており, 再興が求められている。HVdCのコーディングスキルの習得困難が日本でのHVdC研究の普及を阻んでいる背景を指摘し, 日本における今後の研究の方向性を示した。

キーワード: 夢, 夢内容, 量的研究, Hall & Van de Castleシステム, 性差, 年齢差, 文化差, 日本人の夢

* 追手門学院大学心理学部

夢の研究における夢内容の量的研究の位置づけ

夢とは、睡眠時の主観的体験である。夢は深層心理学が始まった当初から「無意識への王道」とされ、臨床的に重視されてきた。ユング派を代表として、深層心理学的心理療法における夢の重要性は今日においても変わらない。臨床心理学の分野では、夢の臨床的活用や夢の解釈などを主に事例研究と理論研究によって明らかにしてきた一方で、高速眼球運動（Rapid Eye Movement：REM）の発見に続いて、睡眠時の夢見、そして夢の機能や覚醒時の思考との関連などに関する膨大な生理学的、神経科学的、基礎心理学的研究がなされてきた。

調査・実験に基づく夢の心理学的研究のテーマだけでも、夢の内容、夢の想起、夢に対する態度、悪夢、明晰夢、精神疾患患者など特定の集団の夢、それらを総合して夢の機能を論じるものなど幅広い。本稿では、夢に関する膨大な研究の中でも、夢の内容を量的に研究したものに限って、調査方法、夢内容の分析方法、海外と日本における夢内容の量的研究の知見をレビューする。したがって、夢の臨床的利用や夢分析はもちろんのこと、夢想起頻度、夢の神経生理学的研究、悪夢や明晰夢、夢内容とその他の特性（性格、疾患等）の関連などについては原則的に触れない。このような限定された範囲であっても、この数十年のうちに欧米圏でなされた研究の数は膨大であり、網羅することはできない。そのため、概要をできるだけ包括的に記述することに努め、より詳しい記述については、どの文献に記載されているかを示すことで代えた。ただし、日本人の夢内容の量的研究に関する論文については、手に入ったものはすべて網羅した。

夢内容の量的研究が進み始めたのは1960年代ころからである。現時点で最も妥当性・信頼性の高い夢内容分析ツールである「Hall & Van de Castleシステム（以下、HVdC）」（Hall & Van de Castle, 1966）もこの時期に開発された。後述するように、海外ではこのHVdCをはじめとして夢の量的研究知見がかなり蓄積されており、すでにレビューもいくつかある（Domhoff & Schneider, 2008；Zadra & Domhoff, 2011；Schredl, 2018；Domhoff, 2022）¹。

しかし、夢内容研究の知見について日本語で読めるものとしては鑑（1990）、岡田（2011）、Zadra & Stickgold（2021/2021）、松田（2021）などの一般書に若干の紹介があるのと、本稿で取り上げる日本語の調査論文でも先行研究がレビューされているものの、上記の英語で書かれているような包括的なレビューはない。そこで、日本における夢内容の量的研究の復興の足掛かりとするため、本稿にまとめることとした。なお、本稿執筆に際して上記の英語のレビューのほか、田附他（2024）の発表資料を参照したことを明記しておく。

1 特に夢内容の量的研究の方法については、上記のレビューのほかSchredl（2010）が全般的にまとめているのと、Domhoff（2024）が主にHVdCの方法についてコーディングや統計処理上の問題点についてまとめている。

夢内容の収集方法

夢の研究者は、研究参加者が見た夢を直接観察することは原理的に不可能であるため、何らかの方法で間接的に夢を報告してもらう必要がある。それらは、寝る場所（自宅、睡眠実験室）、覚醒方法（自然覚醒、誘発覚醒）、睡眠時期や睡眠段階（睡眠初期、中期、後期；レム睡眠、ノンレム睡眠）、夢の報告方法（口頭、質問紙、夢日記、心理療法）などのバリエーションがある。以下に、各方法について概説する。

睡眠実験室

睡眠の研究は多くが睡眠実験室で行われるが、この睡眠実験の際に（多くは他の生理・神経指標と合わせて）夢を収集する方法がある。ノンレム睡眠時に比べてレム睡眠時に覚醒した方が夢報告率が格段に上がるため（それぞれ約10%、約90%とされる；Schredl, 2018など）、多くはレム睡眠時（あるいは睡眠後期のノンレム睡眠第2段階）に誘発覚醒を行い、口頭で夢を報告してもらう方法が取られる。睡眠実験室研究の長所は、一晩で多くの夢（4、5個）を集められるだけでなく、たとえば質問紙法などと比べて研究協力者が夢を選ぶバイアスを弱められることである。一方でこの方法の短所は、非常に費用と労力がかかること、悪夢や性的な夢など実験室で見られにくい種類の夢があること、実験室で寝ているという状況そのものが影響すること（実験室でのレム夢の約20%は実験室に関連した内容になる）がある。したがって、他の方法で収集した夢が持つ特徴の偏りを評価するために、基準となるベースラインを整える役に立つ方法といえる。

夢記録

夢の想起頻度や夢の内容に関して回顧的に尋ねる方法は、実際の夢想起頻度を反映していなかったり、覚えていやすい夢や報告しやすい夢が選ばれたりする点で限界がある。それを解決するのが夢記録法である。これは、すでに協力者がつけていた夢日記を提出するのではなく、研究者が協力者に一定期間の間、朝起きた際に夢の記録をつけてもらう前向き研究法である。夢記録には2種類あり、一つ目はチェックリスト方式である。協力者は、夢を見たかどうか、見た場合は夢の数と簡単な種類（悪夢など）を記入する。もう一つはナレーション・ログ（語り記録）方式であり、見た夢すべてを文章で記録またはレコーダーに口頭で録音する方法である。後者は協力者にとって面倒であるため、思い出した夢のうち特徴的なものだけが選ばれている可能性が示唆されているものの、それでも以下に述べる回顧的方法と比べると格段にバイアスが少ない。

質問紙

質問紙で回顧的に夢内容を報告してもらう方法も有効な方法である。最も多いのは「最近の夢法（Most Recent Dream Method）（Hartmann, Elkin, & Garg, 1991）」であるが、そのほかにも幼少期の印象的な夢、反復夢、最も怖かった悪夢などを尋ねる方法もある。質問紙法は、前述の通り、記憶に残りやすい夢、報告しやすい夢が意識的または無意識的に選定されるというバイアスがかかる。たとえば、悪夢の頻度を回顧的に自己報告してもらうと、自宅で夢記録をつけて

もらうよりも頻度を過少報告する傾向がある (Wood & Bootzin, 1990 ; Zadra & Donderi, 2000)。一方で、実施の簡便さなどから、多くの研究がこの方法で行われている。たとえば、ある研究では、2週間分の夢日記と質問紙法による回顧的な夢報告の両方を収集して比較した結果、両者の攻撃的、友好的、性的かかわりの出現頻度に関連が見られなかった (Bernstein & Belicki, 1994)。一方で、反復夢や実存的な夢などは、睡眠実験室や夢記録の調査期間にそのような夢を見るとは限らないので、質問紙法に頼るしかないだろう。

心理療法

心理療法でクライアントからセラピストに報告された夢については、クライアントのパーソナリティや心理的問題、心理療法の経過などに関連させて、事例研究の形で扱われてきた。そして、その多くは夢の解釈、夢の意味が焦点となっている。しかし、心理療法で報告された夢を量的に分析した研究も少ないながらある。たとえば河合 (1975) は、健康群2名、神経症群2名、境界例および統合失調症群2名 (いずれも男性) との心理療法で報告された最初の30個の夢をHVdCで分析している。最近では、Roesler (2018) およびRoesler, Konakawa, & Tanaka (2021) も、ユング派の分析家またはその訓練を受けているセラピストが行った心理療法においてクライアントから報告された夢を、事例的にではなく、量的に分析している珍しい研究である。

サンプルサイズ

夢内容の量的研究においては、サンプルサイズを常に大きくしておく必要がある。心理学だけでなく、様々な領域で再現性の問題が指摘されているが、特に夢内容の研究では、効果量が比較的小さいこと、夢内容の各要素 (特定の登場人物、特定の活動、など) はいずれも頻度が低いことから (Domhoff, 2022)、少なくとも100個から数百個程度の夢報告が必要である。

夢内容の分析方法

分析方法の種類

夢内容に関する研究には、大きく分けて二つのアプローチがある。一つは「追いかけられる夢」「遅刻する夢」といった夢の主題からアプローチする方法 (主題的アプローチ)、もう一つは夢の報告を「登場人物」「場面」「他者との交流」といった側面ごとに評定していく方法 (要素的アプローチ) である。

主題アプローチとしてよく使われているのが典型夢質問紙 (Typical Dream Questionnaire: TDQ) (Nielsen, Zadra, Simard, Saucier, Stenstrom, Smith, & Kuiken, 2003) である。これは現在世界で最もよく使われている典型夢の質問紙であるが、あの宮城音弥らの研究 (Griffith, Miyagi, Tago, 1958) が基になっている。日本では鑑・平野 (1985) なども独自の典型夢質問票を用いていた。これらは、実際に見た夢の内容を記述してもらうのではなく、数十種類の典型夢について「これまでに見たことがあるか」と尋ねる手法で、記憶のバイアスが大きい点が問題で

ある。

要素的アプローチとして最も有名なものは先述したHVdCシステムである。この分析法については次項で詳述する。HVdCシステムを補強するものとして、Schredl (1988) の夢マニュアルがある。これは、夢の長さ (3段階)、現実／奇異 (4段階)、登場人数、言語的かわり (有無)、身体的かわり (有無)、攻撃 (4種：身体的v.s.言語的、自分に対してv.s.自分から他者へ、それぞれの有無)、ポジティブ夢感情 (4段階：なし、弱、中、強)、ネガティブ感情 (4段階：なし、弱、中、強) からなる比較的シンプルなものである。

そのほかには、ある特定の要素 (たばこを吸う場面、戦争に関係した要素、など) が出てくるか、どのような色が出てくるか、など特定の要素のみを分析している研究もある。

Hall & Van de Castle (HVdC) システム

HVdCシステムはHall & Van de Castle (1966) が開発した夢内容の包括的な分析方法である。彼らはFreudやJungなどのそれまでの有名な夢理論および数十種類にも及ぶ既存の夢分析尺度 (敵意尺度、口唇性尺度、肛門性尺度、マゾヒズム尺度など) をレビューし、包括的かつ信頼性 (評定者間一致率) の高い分析システムを開発した。

具体的には、夢に出てくる登場人物、かわり、活動など10次元をロールシャッハ・テストのように細かくコーディングする体系的な内容分析法である (Table1)。なお、HVdCシステムには独自の用語があり、訳語は本稿では表の通りで統一してあるが、定訳があるわけではなく、日本語文献では表記が異なる場合があることに留意されたい。HVdCは非常に包括的であるため、むしろ全ての要素をコーディングすることは少なく、研究の目的に合わせて、感情、色など一部だけを用いることもある。単純なコードそのものとそれらのコードによって算出される指標がある。これは、ロールシャッハ・テストに、スコアリングそのもの (W, F, +, Aなど) に加えて、それらを基に計算した様々な比率 (F + %, M : ΣC など) があるのと同様である。

こういった地道なコーディングは、箱庭療法で言うところのアイテムの数を種類ごとに数え上げたり年齢ごとの制作時間を計ったりというような基礎研究 (岡田, 1984; 木村, 1985) と同じで、無理論的で臨床的問題に直結するわけではないものの、様々な応用的研究の基礎や前提となる重要な情報を提供してくれる。さらに1994年には「DreamSAT」という「Hall & Van de Castleシステム」のコーディングを自動で統計的に処理するファイルが公開されたことで、2000年代から大量の夢を扱う研究が行われてきた。

また、Hall & Van de Castle (1966) には、1947年から1950年のアメリカの大学生男女各100人が見た合計1000個の夢をコーディングした結果が基準データ (Norm) として掲載されており、各研究者は自らのデータと基準データを簡単に比較することができるようになっている²。70年

2 HVdCの基準データはDomhoff (1996) のAppendix Eに掲載されており、インターネットから無料でダウンロードできる。またSchneider & Domhoff (2024a) でも閲覧可能。

以上前のデータとなると基準にならないと考えられるかもしれないが、Hall & Van de Castle (1966) が見出した一般的な夢の特徴は、50単語から300単語の長さの夢において、その後様々な調査で何度も再現されている (Domhoff, 1996, pp.68-73; Dudley & Fungaroli, 1987; Dudley & Swank, 1990; Hall, Domhoff, Blick, & Weesner, 1982; Tonay, 1990/1991)。したがって、Hallらの基準データは、異文化間の比較や、夢内容の個人差を検討する際の一つの基準とみなしても良いだろう。ただし、1950年前後のアメリカ人の若者の夢を基に作られたコーディング・システム自体を、どの時代のどの文化の人の夢にも使える普遍的なものとみなしてよいかどうかについては議論の余地があるだろう。

なお、HVdCシステムについて詳しくは、Domhoff (1996) 第2章に概要が、Appendix Aには絶版になっており入手しにくくなったHall & Van de Castle (1966) のコーディング・ルールのパートがほぼすべて転載されている (Appendix Bにはコーディング例がある)。

Table1 Hall & Van de Castle システムの下位尺度

1. 登場人物 (Characters)
種類：人、動物、非現実的生物、神話的生物
性質：人数 (個人v.s.集団)、性別、年代 (4段階)、家族 (12種)、親戚、知っている人、知らない人、不確かな人、目立つ人、職業の人物、人種
2. かかわり (Social interaction)
攻撃のかかわり (「死ぬ」「身体的攻撃」「言葉による脅迫」など8段階)
友好的のかかわり (「長期の親密な関係」「贈り物」など7段階)
性的のかかわり (「性交」「愛撫」「性的な誘い」など5段階)
3. 活動 (Activity)
身体的活動、移動、場所の変化、言語だけの活動、聞く活動、コミュニケーション、思考
4. 努力の結果 (Achievement outcomes)
成功と失敗
5. 外圧 (Environmental press)
幸運、不運 (5種)
6. 感情 (Emotions)
怒り、不安、喜び、悲しみ、混乱
7. 物理的環境：場面と事物 (Physical surroundings : Settings and objects)
場面
種類：屋内、屋外、屋内外不明、歪曲された場面、場面なし
性質：身近、身近だが実際とは違う、身近でない、身近か不明、地理
事物
種類：建物 (7種)、家具、食物、道具 (3種)、道、区画、自然、身体、衣服、コミュニケーション、お金、その他
8. 描写的要素 (Descriptive elements)
修飾語：色 (2種)、大きさ (2種)、新旧 (2種)、速度 (2種)、直線性 (2種)、強さ (2種)、価値 (2種)
時間尺度
否定語尺度 (無、全然、～ない)
9. 料理と食事 (Food and Eating)
食べること、食事の場所、食事の準備、食べ物の選択、食べ物

10. 過去からの要素 (Elements from the Past)

過去の場所、実際よりも若い夢見手、過去の知り合い、過去の行為、実際よりも若い登場人物、過去の物理論的尺度

去勢不安、去勢願望、ペニス羨望、口唇的取り入れ、退行

夢内容の量的研究の知見の概観

本節では、健康な一般人の夢の内容について、量的研究によってこれまでにわかっている知見をまとめる。知見は膨大であるため、夢の一般的特徴、性差、年齢差、文化差のみにしぼり、夢内容と他の指標（パーソナリティ特性、夢想起頻度、など）との関連を調べた研究は除外した。なお、年齢差、性差、文化差についてはDomhoff & Schneider (2008), Zadra & Domhoff (2011, 2021), Domhoff (2022) 第3章に詳しい。以下では、上記文献にレビューされている知見を中心に概説する。

夢の一般的特徴

「普通の夢」とはどんなものか。「夢らしい夢」といえば、歯が抜ける夢、人前で服がない夢、電車に乗り遅れる夢、試験に遅刻する夢などを思い浮かべるかもしれないが、これらははたしてどれほど一般的なのか。この項ではまず、夢の一般的な特徴について述べる。

まずは、Hall & Van de Castle (1966) の基準データから、多くの夢に共通する内容を挙げる (Domhoff, 2022, Ch. 3 ; Zadra & Stickgold, 2021/2021, pp.77-83)。

90%以上の夢では、夢の中で自分が参加しており、自分が登場しない夢は10%未満である (Soper, Milford, & Rosenthal, 1994 ; Strauch & Meier, 1996も参照)。夢には、たいていの場合は自分以外にあと二人は出てくる。自分以外に動物しか出てこない夢は全体の2.1%、動物すら出てこない夢は全体の4.3%であり、その他の93.6%は自分以外に少なくとも一人の登場人物がいる。ちなみに、自分しか出てこない夢はなぜか不運（障害物に直面する、落ちる、危険な状態にある、事故に巻き込まれる、車が故障する、など）が起こる割合が高い (62.8% v.s. 33.5% ; $h=0.59$)。平均して登場人物の半分は親戚、友人、同僚、知人など知っている人で、もう半分は知らない人（警察や医者などの職業も含む）である。自分や他の登場人物は、何かを見たり、歩いたり、会話したり、何かしらの活動を行っていることが多い。

67.2%の夢で少なくとも一つの対人交流がある。46%の夢で攻撃的かかわりがあり、40%の夢では友好的かかわりがあり、性的なかかわりの夢は8%（男性12%、女性4%と性差あり）である (Figure1)。なお、このうち20%程度は、夢の私は参加せずに観察者になっている。ただし、「かかわり」とはいても、自分から相手にかかわり、相手からも自分にかかわるもの（相互的かかわり）のある夢は少ない。たとえば攻撃しても反撃があるのは6分の1以下だし、友好的なかかわりも相手からの反応につながるのはわずか4.3%である。これは現実とはかなり異なる夢

特有の特徴であろう。

ほとんどの夢には何らかの場所や設定があるが、半分は「何となく知っている場所」であり、知っている場所は34%、まったく知らない場所は15%ほどである。35%の夢で不運なことが起こるが、逆に幸運なことが起こる夢は6%しかない。夢で体験する感情の80%は怒り、不安、悲しみ、混乱いずれかのネガティブ感情であり、ポジティブ感情は20%程度である。しかし、だからといって夢自体がネガティブなものとは限らない。比較的最近の研究（Sikka et al., 2017）では、夢見手自身が評定したところ、ポジティブな夢が55.8%に対して、ネガティブな夢が35.3%であった。ただし、第三者が評定した場合には、ポジティブな夢が12.5%に対してネガティブな夢が28.1%と逆転する。

その他、すべての夢は視覚的であり、53-76%には音があり、8%の夢には平衡感覚が含まれるという調査結果もあるが、その他の嗅覚、触覚、内臓感覚、痛覚などを感じる夢は1%以下である（Schredl, 2018, Ch. 4）。

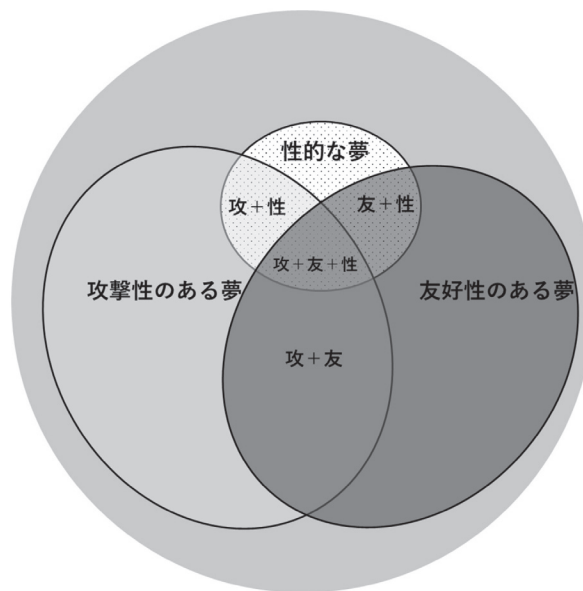


Figure1 Hall & Van de Castle (1966) の基準データにおける
攻撃的、友好的、性的かかわりのある夢のオイラー図
一番大きな真円が夢全体を表す
(Domhoff (2022) ch.3, p.74, Figure 3.1から引用)

性差

性差は、それほど大きくないものの、一貫して報告されているものがいくつかある³。全体的

3 性差については、Domhoff (2005) も参照。

には (Domhoff, 1996, 2022), 男性は女性よりも、攻撃的かわり、性的かわり、道具（武器を含む）が出てくる夢、胴体や臓器が出てくる夢が多い。逆に、女性は男性より、友好的かわり、感情のある夢、衣服に言及される夢、知人が出てくる夢が多い。これらの夢内容の性差の多くは、覚醒時の行動や思考の性差を反映していると考えられる。

HVdCの基準データでも、男女の夢の性差のパターンも明らかになっている。たとえば、女性が見る夢には男女がおおよそ半数ずつ登場するが（男性37%：女性40%）、男性が見る夢には男性が約2倍多く登場する（男性52%：女性26%）。女性の見る夢の場所は屋内が多いが（屋内55%：屋外45%）、男性の夢は逆に屋外が多い（屋内44%：屋外47%）。これは子どもや青年でも同様である (Schredl et al., 2019)。また、当然予想される通り、性的かわりのある夢は男性が女性の3倍である（男性12%：女性4%）。また、男性の夢では身体的な攻撃の割合が高く、女性の夢では拒絶や排除の割合が高い。8-13歳の子どもの夢でも同様の性差が見られる (Karagianni, Papadopoulou, Kallini, Dadatsi, Abatzoglou, & Zilikis, 2013)。この性差は、男児は女児よりも身体的な攻撃をしやすく、女児は「社会的攻撃」（排除、拒絶、批判）をしやすい (Underwood, 2003) という覚醒時の特徴と類似している。活動や事物のカテゴリーの性差も、覚醒時の関心事の性差と平行している。たとえば、男性の夢は身体的活動が多く（27%；女性は20%）、女性は会話していることが多い（26%；男性は20%）。また、男性の夢では道具や車の登場が多く、女性の夢では衣服や日用品の登場が多い。

後に続く研究も、同様の結果を再現している (Domhoff, 1996, pp.68-73；Dudley & Fungaroli, 1987；Dudley & Swank, 1990；Hall et al., 1982；Mathes & Schredl, 2013；Tonay, 1990/1991)。近年でも、約24,000個の夢をAIを用いて分析したFogli et al. (2020) が同じ傾向を見出している。すなわち、男性は女性よりも、攻撃的な夢、ネガティブ感情（怒り、不安、悲しみ）の夢が多く、逆に女性は男性よりも、友好的な夢、ポジティブ感情（喜び）の夢が多かった。

しかし、近年この傾向が変わってきている可能性を示唆するデータが出てきている。たとえば、夢に登場する男性／女性の割合が男性の夢と女性の夢では大きく異なるという上述の傾向が、少なくともドイツの大学生では消失している可能性がある (Domhoff, Meyer-Gomes, & Schredl, 2005-2006；Mathes & Schredl, 2013；Schredl et al., 2003)。この傾向が今後も再現され、ドイツの男女平等の拡大やその他の文化的変化と関連づけることができれば、理論的にも重要な進展となる。

年齢差

夢内容の年齢差を調べた量的研究はあまり多くはない。子どもの夢内容は大人と異なること、成人の夢では攻撃的かわりが年齢とともに漸減することは一貫しているもののそれ以外の年齢差は大きくないことがわかっている。したがって、成人の夢内容から夢見手の年齢層をブラインドで当てることは一たとえば「私の息子」や「退職した父親」が出てきたりすれば当然ヒントにはなるが— かなり難しい。

子どもの夢の量的研究に関しては、実は日本の研究が先駆的である。稲浦他（1983）が小学生の夢、稲浦他（1982）と加藤（1983）が中学生の夢をHVdCシステムでコーティングして精査している。また、北見（1959）が小学生の、北見（1957）が中学生と高校生の、鑑・平野（1985）が小学生から社会人までの典型夢を調べている。これらはまだFoulkes（1999）の子どもの夢に関する記念碑的研究が出版される前のことである。

子どもから大人へかけての変化にはある程度一貫した傾向がある。たとえば子どもの夢の約40%には何らかの動物が出てくるが、大人の夢では5%程度である。青年期には攻撃的かかわりが増える（Dale, Lafrenière, Koninck, 2013）。女性の登場人物、知っている登場人物、活動（合計）、攻撃的かかわり、友好的かかわりは、思春期から老年期にかけて直線的に減少する（Dale, Lortie-Lussier, Koninck, 2015）。8-13歳で見ると、年齢とともに友人の割合が増加し、家族の割合が減少する（Karagianni et al., 2013）。イギリスの8-11歳の子どもを対象にした別の研究では、知っている登場人物、攻撃的かかわり、感情、自己像が年齢とともに増加したと報告している。

成人以降の変化は緩やかであるが、一貫した傾向も報告されている。30歳から80歳のアメリカ人女性から得た281個の夢報告から、年齢による夢内容の違いを調査した最初の大規模研究（Hall & Domhoff, 1963, 1964）では、主に攻撃的かかわりの頻度が年齢とともに減少する可能性を示している。同様の結果は、異なるコーディングシステムを用いた研究（Brenneis, 1975）でも報告されている。この研究では、18歳から26歳の38人の女性大学生の夢（148個）と40歳から86歳の43人の女性大学生（2人を除く）の夢（185個）を比較している。男性も同様であり、27歳から64歳の男性58人の年齢差の研究（Zepelin, 1980, 1981）でも、やはり攻撃的かかわりの頻度が漸減した。この研究ではこのほか、家族に関連する夢の割合は35歳から55歳までで高かったと報告されているが、これはその年齢層の多くの成人にとって、現実生活で子育てが焦点になっていることと整合している。そのほか、フランス系カナダ人女性47人を対象とした横断研究（Côté, Lortie-Lussier, Roy, & De Koninck, 1996）では、25-35歳、36-45歳、46-56歳の3郡のうち高齢群においてより快適な夢であったこと、感情の頻度がわずかに低下したことが報告されている。

しかし、縦断研究（Lortie-Lussier, Cote, & Vachon, 2000）では結果が変わってくる。この研究のデザインは独特で、もともと10年前から17年前に夢日記をつけていたカナダ人女性たちに、改めて2週間の夢日記を記録してもらっている。それらをHVdCでコーティングした指標を30-39歳（7人）、40-49歳（10人）、50-55歳（4人）の群間で比較したところ、統計的に有意な差は認められなかったのである。横断研究デザインでは、時代と世代の影響も含まれていることには注意しなければならない。

サンプルの異なる別の2つの横断研究（Dale, Lortie-Lussier, & De Koninck, 2015, 2016）では、女性でも男性でも年齢差はより複雑である。まず女性を対象にした研究から述べると、12-17歳、19-24歳、25-39歳、40-65歳、65-85歳の5つの年齢群に分けたカナダ人女性（計375人）から得

た375個の夢では、攻撃者になる夢は年齢が上がるにつれてわずかに減少し、攻撃的かわりだけでなく、知っている登場人物、活動の数、F/C指数（登場人物一人あたりの友好的かわりの数）などもより大きく減少した。次に、同様の5つの年齢群に分けたカナダ男性（計231人）の231個の夢では、思春期から若者にかけて攻撃的かわりの頻度が低下したが、それ以降の年代では増減なく維持しており、25歳以上の3つの年代ではF/C指数と活動の数が女性とは逆に徐々に増加していった。

チューリッヒ大学の高齢者を対象とした2つの大規模研究（Strauch, 2003, 2014）では実験室夢と夢記録を対象にしており、結果が異なる。2003年の研究では、66歳から78歳までの女性15名と男性9名から、睡眠実験室で収集された253個の夢報告と2週間かけて家庭でボイスレコーダーを使用して収集した夢報告を、対照群のスイス人の若者と比較した。その結果、有意差があったのはたった2項目で、高齢者の夢の方が知らない登場人物および知らない環境の割合が高いことだけであった。2014年の研究では、65歳から89歳までの女性106名と男性45名に最近の夢の報告を尋ね、同様にスイス人の若年成人の夢と比較したところ、上記と全く同じ結果、つまり高齢者群では知らない登場人物および知らない環境の割合が高かったという結果であった。ただし、こちらの研究では高齢者の夢では攻撃的かわりが低かったことも確認されている。

文化差

世界の様々な文化圏・国に住む人々の夢には多くの共通点があることがわかっているが、相違点も見いだされている。たとえば、上記の性差はおよそどの文化圏でも多かれ少なかれ見いだされている。一方で、下記の通りイラン人、インド人、日本人などアジア人の夢には家族、知っている人や状況が登場しやすいことがわかっている。

夢内容の国際比較に関する最も詳細な研究は、チューリッヒ大学の睡眠夢実験室で収集されたスイスの若年成人男女の夢報告とHVdCの基準データを比較した研究（Domhoff & Schneider, 1999）である。HVdCのコーディングに基づいて比較したところ、スイス人とアメリカ人は、平均場面数、平均登場人物数、登場人物の男女比、動物率（全登場人物における動物の割合）、友好率（全かわりにおける友好的かわりの割合）の点で非常に類似していた。しかし、スイス人は男女ともに、アメリカ人よりも友好的かわりを始める割合が非常に高く、スイスの女性は基準データよりも知らない登場人物の割合が高く、スイスの男性は基準データよりも屋外場面の割合が高かった。ドイツの女子大学生106人から得た246個の夢と男子大学生39人から得た95個の夢から成る同じデータベースに基づく2つの研究（Domhoff, Meyer-Gomes, and Schredl, 2005-2006；Schredl, Petra, Bishop, Golitz, & Buschtuns, 2003）でも同様の結果で、ドイツ人とアメリカ人の夢は大同小異であった。テヘラン大学の男性115名、女性103名から一人一個提出してもらった218個の夢でも、HVdCの基準データと多くの類似点がありつつも、イラン人の夢では攻撃的かわりや性的かわりが少なく、家族などの知っている登場人物の割合が高いことがわかった（Mazandarani, Aguilar-Vafaie, & Domhoff, 2013）。家族や知っている登場人物が基準

データよりも高かったのはインド人も同様である (Prasad, 1982)。

日本の徳島大学で行われた実験室と非実験室の比較研究 (Yamanaka, Morita, Matsumoto, 1982) では、女性から193個、男性から104個の夢報告が得られ、事物と活動では男女ともにHVdCの基準データとほぼ同じ結果が得られた。しかし、日本人の夢は基準データよりも登場人物の数自体が多く、知っている登場人物も圧倒的に多かった。また、男女ともに、少なくとも1つの攻撃的かわり子が含まれる夢の割合が、基準データと比較して非常に低く、女性26% (アメリカ人女性44%) で男性14% (アメリカ人男性47%) であったのが特徴的であった。

以上の通り、概して各国の夢は多くのケースで相違点よりも類似点が多い。ただし、攻撃性に関連する指標については米国が先進諸外国よりはるかに高い。また、知っている登場人物の割合にも違いがある。なお、このほかHVdCシステムを用いたここ10年ほどの研究としては、イギリス人とイタリア人の夢 (DeCiccol, Donati, & Pini, 2012)、イタリアとカナダの夢 (DeCicco, Zanasi, Dale, Murkar, Longo, & Testoni, 2013) を比較した研究のほか、HVdCの基準データとウクライナ人の夢 (Taitz, Kozmová, Krippner, & Tartz, 2021) を比較した研究などがある。

以上は先進諸国の国際比較であったが、少数民族の夢に関する研究も盛んになされてきた。Schneider (1969) はHVdCのいくつかの下位尺度に類似した尺度を用いて、Alor, Kwakiutl, Navaho, Tinguian, Truk, Yir Yirontなど13の伝統的民族の56個から数百の夢を分析した。そのうちの2つの民族は狩猟採集を基盤としており、残りの先住民族はなんらかの農業に大きく依存していた。これらの夢報告は異なる条件下で収集され、多くの夢報告は比較的簡潔であったため、結論はやや一般的であるが、以下のようにまとめている。(1) 社会や文化に関係なく、夢の内容には人類に共通する一定の規則性がある。たとえば、常に複数の登場人物よりも単独の登場人物の方が多く、動物よりも人間の方が多く、知らない人物よりも知っている人物の方が多い、これらの社会では (ホビの女性を除き) A/C指数 (登場人物あたりの攻撃的かわり子の数) がF/C指数 (登場人物あたりの友好的かわり子の数) より高い。また、先住民族の夢見手も (2つの民族を除いて) 攻撃の加害者より頻繁に被害者である夢を見る。通常、非身体的な攻撃よりも身体的な攻撃の方が多い。(2) しかし、民族間にはそれぞれの文化に関連すると思われる一定の差異もある。たとえば、上記の通りどの民族の人の夢においても攻撃の加害者よりも被害者であることが多かったが、被害者である割合は民族によって違った。また、ホビを除くすべての民族で、身体的攻撃の含まれる夢の割合はアメリカ人よりも高かった (Table2)。先ほど、大人の夢では動物が5%程度であると述べたが、それは都市在住者を対象にした調査であり、狩猟採集民族では人々の夢の25%に動物が登場する。

Table2 各民族の身体的攻撃の含まれる夢の割合 (Schneider & Domhoff, 2024b)

民族	男性	女性
Yir Yiront (オーストラリア先住民族)	92	n/a
Baiga (中央インド)	86	n/a
Navaho (アメリカ先住民族)	77	n/a
Skolt (フィンランド先住民族)	70	68
Ifaluk (太平洋カロリン諸島民族)	60	40
Tinquian (台湾原住民族)	55	46
Alor (インドネシア民族)	53	61
アメリカ人	50	34
Hopi (アメリカ先住民族)	40	39
フランス系カナダ人	n/a	31
オランダ人	32	14
スイス人	29	23

その他

その他、よく研究されているものをいくつか取り上げて紹介する。

夢内容とパーソナリティ特性の関連についての研究も多い。ただ、Blagrove & Pace-Schott (2010) は10の研究をレビューして、養護性、支配性などのパーソナリティ特性と夢内容の関連をメタ分析した結果、概ね関連がなかったと報告している。パーソナリティと夢想起頻度を調べたメタ分析 (Beaulieu-Prevost & Zadra, 2007) でも、パーソナリティ尺度の得点は夢想起頻度そのものには関連せず、むしろ夢想起を回顧的に過小報告／過大報告する傾向に関連していたという。ただし、個別の研究を見てももちろん若干の例外があり、たとえばMathes & Schredl (2013) は、ドイツの大学生を対象にBig Fiveの性格次元と夢内容の関連を調べた研究で、例えば外向的な男性の夢には内向的な男性の夢に比べてより多くの女性の登場人物が含まれていた、などと報告している。

睡眠状態と夢内容の関連も報告がある。そもそもレム睡眠期に誘発覚醒すると90%以上の人が夢を報告するのに対して、ノンレム睡眠では10%ほどの人しか報告できない。しかも、ノンレム睡眠の夢は夢というよりも思考に近い。しかし、夜が深まるにつれてノンレム睡眠はレム睡眠に近づくという。それでも、深夜のレム夢とノンレム夢の内容は攻撃的かかわりの頻度が異なると報告されている (McNamara, McLaren, & Durso, 2007)。また、実験室夢すなわち睡眠実験室で寝て夜中のREM睡眠時に何度か起こされて報告する夢と、自宅夢すなわち家で朝起きる直前に見た夢は、それほど違いがないことがわかっている。つまり、自宅夢は夢全体の代表サンプルとして十分な妥当性があると言える。ただし、若者に限っては自宅夢の方が攻撃的かかわりの頻度が少し高いことが報告されている (Domhoff & Kamiya, 1964; Weisz & Foulkes, 1970)。

夢内容の時代的变化についての検討は多くないが、先述したFogli et al. (2020) は大量の夢の

分析から、攻撃的な夢は1960年代に最も多く、その後2000年代にかけて徐々に減っていることを報告している。

日本人の夢内容の量的研究

日本における夢内容の量的研究は、大きく次の二つのグループがある（一部例外あり）（Table3）。すなわち、40年以上前に行われた典型夢およびHVdCシステムの研究、および近年のRoeslerの夢構造分析を用いた研究である。

前節で紹介した通り、主に欧米の先進諸国では様々な人たち（一般人、兵士、喫煙者、統合失調症患者）の夢をHVdCシステムで分析する研究が盛んに行われている。一方、日本においては、HVdCシステムを用いた研究は、1975-83年に5件ある（河合, 1975; Yamanaka et al., 1982; 稲浦他, 1982, 1983; 加藤, 1983）。河合（1975）を除く11編はすべて、小学生から大学生までを対象にした調査研究であり、河合（1975）のみセラピーで報告された夢を分析した臨床研究である。しかし、次第に事例研究の隆盛に伴い夢の量的研究自体が衰退してしまった。そのため、大学生よりも年齢の高い成人の日本人の夢内容のHVdCのデータは現時点で存在しないし、最後の研究から40年以上を経た現代の日本人の夢内容（登場人物、場面、攻撃的・友好的・性的かわり、など）はどのような割合で分布しているのか、性差や年齢差はあるのか、現代も40年以上前のYamanaka et al.（1982）と同様の傾向を示すのか、などの基礎的データが不足している。

主題アプローチの研究は9編ある（北見, 1957, 1958, 1959; Griffin et al., 1958; 鑑他, 1985, 1986; 松本, 2005; 森田・岡本・高野・池田, 2014; 田附・東森・武, 2024）⁴。日本における典型夢の測定ではそれぞれが独自の主題を設定しており、海外でよく使用されているTDQを用いた研究もない。なお、Zadra & Stickgold（2011）は、Griffin et al.（1958）を初めての本格的な典型夢の研究と位置付けているが、この研究が宮城音弥らによる日米比較の研究であったことから分かる通り、日本の夢の調査研究は世界的に見てもスタートは早かったのである。最近では、田附他（2024）が、主題の設定自体を、理論的ではなく、計量的に行っている点で新しい。

近年、京都大学系の研究者らが、Roesler（2018）の開発した「夢の構造分析」を使用した量的研究を行っており、現時点で日本人の夢を対象にした研究は6編ある（粉川他, 2018; 粉川, 2020; Roesler et al., 2021; Tazuke, 2021; Yoshikawa, 2023, 2024）。「夢の構造分析」は、HVdCのように夢内容を細かくスコアするのではなく、「夢の私」のあり方を構造的にとらえようとする、抽象的な内容分析と言える。夢の内容の細部に捉われず大まかな構造を捉える臨牀的にも有用なツールであるが、一方で登場人物は何人でてくるのか、屋内と屋外ではどちらの夢の方が多

4 Yamanaka et al.（1982）と同一データに基づく2編の研究（山中・森田・松本, 1981a, 1981b）は含まなかった。

いかといった基礎的な情報の多くを捨象することになる。そもそも「夢の構造分析」は心理療法で報告された夢の「シリーズ」を事例的に検討するためのツールであり、もともと調査で大量の人から集められた夢のコーディング用に作られたHVdCシステムとは異なる用途で使われるべきであろう。実際、Roesler et al. (2021) は11人のドイツ人クライアントが見た140個の夢と13人の日本人クライアントが見た168個の夢を対象にしており、一人のクライアントあたり平均12.8個の夢シリーズを分析している。

以上の研究では性差や年齢差についても検討されており、日本人を対象にした研究でも概ね前節で述べた海外の知見と整合性のある結果が報告されている。たとえば鑑・平野（1985）の研究では、主題アプローチで性差を検討しているが、その結果、男性では女性より、「恐怖の体験」、「人を非難・攻撃」、「人を殺す」、「乗り物」、「成功」、「失敗」、「追われる」、「セックス」、「のぞきみ」などが多かった。逆に、女性は男性より、「楽しい」、「泣く」、「自分の家族・家庭」、「日常の出来事」、「母」、「近親者の死」、「食べる」が多かった。海外の研究で共通して見出されている性差、すなわち男性は女性よりも、攻撃的かわり、性的かわりのある夢が多く、女性は男性より、感情のある夢、知っている人が出てくる夢が多いといった性差を追認しているが、諸外国の研究ではあまり見いだされていない性差（成功、失敗、母、食べる、など）もあるのが興味深い。

発達期（小学生から大学生まで）の夢内容の変化に関する量的研究はそれなりの蓄積がある。古くは北見（1957, 1958, 1959）や水本（1962）などの児童研究から始まる。稲浦他（1982, 1983）、加藤（1983）はHVdCで小学生から大学生までの夢内容を検討しており、北見（1957, 1958, 1959）、関根・小川（1984, 1985）、鑑・平野（1985, 1986）は小学生から大学生の夢内容の特徴を主題アプローチで検討している。近年では、Tazuke（2021）が、先述のRoeslerの「夢の構造分析」をやや改変したものを使用して成人の夢を分析しており、結果の妥当性には課題があるものの、若干の年齢差（高齢者の夢では「困難状況の発生」が少ない、など）を見出している。

その他、悪夢の夢内容の各主題の頻度を調べた研究（岡田・松田, 2019）、夢内容と精神的健康やパーソナリティとの関連（川原井, 2019）や生理指標との関連（川野・小川, 2015）を調べた研究がある。

Table3 日本人を対象とした夢の内容に関する文献まとめ

文献	サンプル（有効回答数）	夢収集法	夢内容の分析ツール
北見（1957）	小学校2年生から高校3年生，計594人	質問紙調査	独自（夢報告をテーマに分類）
北見（1958）	大学生	質問紙調査	独自（夢報告をテーマに分類）
Griffith et al.（1958）	日本人とアメリカ人の大学生，計483人	質問紙調査	独自（典型夢の経験質問紙）
北見（1959）	小学4年生，中学3年生，高校3年生，大学生，計935人	質問紙調査	独自（夢報告をテーマに分類）
水本（1962）	幼稚園児63人，小学生562人，中学生200人	質問紙調査	独自（夢報告をテーマに分類）
河合（1975）	健常群，神経症群，精神病群，男性各2人（19歳から40歳），計6人	心理療法	HVdC（一部；場面，事物，登場人物）
Yamanaka et al.（1982）	大学生39人	REM睡眠期覚醒法	HVdC
稲浦他（1982）	中学1年生から3年生，計194人	質問紙調査	HVdC（一部；場面，事物，登場人物）
稲浦他（1983）	小学4年生から6年生，計469人	質問紙調査	HVdC（一部；場面，事物，登場人物）
加藤（1983）	中学1年生から3年生，計273人	質問紙調査	HVdC（全部）
関根・小川（1984）	中学生から大学生，計644人	質問紙調査	独自（夢報告を主題とHVdCを足したようなもので評定）
関根・小川（1985）	中学生から大学生，計645人	質問紙調査	独自（夢に対する本人の印象評定尺度）
鑑（1985）	小学生，大学生，社会人，計1,673人	質問紙調査	独自（夢の主題の経験質問紙）
鑑（1986）	小学生，大学生，社会人，計1,673人	質問紙調査	独自（夢の主題の経験質問紙）
松本（2005）	大学生，計574人	質問紙調査	鑑（1985）を一部改変
森田他（2014）	大学生199人	質問紙調査	独自（夢報告をテーマに分類）
川野・小川（2015）	大学生5人	質問紙調査	独自（夢報告を項目ごとに評定）
粉川他（2018）	大学生212人	質問紙調査	Roeslerの夢の構造分析
川原井（2019）	大学生120人（夢97個）	質問紙調査	独自
岡田・松田（2019）	大学生124人，社会人4人	質問紙調査	独自（夢報告をテーマに分類）
粉川（2020）	60代から80代，計61人	質問紙調査	Roeslerの夢の構造分析
Roesler et al.（2021）	臨床群：日本人13人（ドイツ人11人），16歳から55歳	心理療法	Roeslerの夢の構造分析
Tazuke（2021）	20代から70代，計392人	質問紙調査（オンライン）	Roeslerの夢の構造分析（改変）
Yoshikawa（2023）	大学生206人（中国は大学生248人）	質問紙調査	Roeslerの夢の構造分析

文献	サンプル（有効回答数）	夢収集法	夢内容の分析ツール
Yoshikawa（2024）	若者，成人，老人， 計559人	質問紙調査（対 面＋オンライン）	Roeslerの夢の構造分析
田附他（2024）	20代から60代，計994人	質問紙調査 （オンライン）	夢報告を構成要素に分解して計量 テキスト分析

世界および日本における夢内容の量的研究の課題

ここまで見てきた通り，世界的にはHVdCを用いた夢内容の量的研究が50年以上かけて蓄積されており，今や年齢差，性差，文化差について相当程度のことをデータに基づいて述べるができるようになってきている。しかし，これらが臨床心理学，特に夢を重視するユング心理学にあまり取り入れられていないように見えるのは，筆者の見識が浅いだけではないかもしれない。もちろん，夢の量的研究が明らかにしてきた知見は，目の前の個々別々のクライアントとの臨床実践に役立つものではないという限界もあると思われるが，かつて日本では主流であった「夢の量的研究を行う臨床家」があまりいなくなってしまうせいもあるのではないだろうか。その点で，Christian Roeslerと彼に続く研究者はみな臨床家でもあり，実証的知見と臨床を結び付けている稀有な存在である。たとえばRoesler（2023）は実証的な夢の研究知見とFreudやJungなどの古典的な夢理論を比較しており，フロイトの夢の理論のいくつかは修正されるべきだとか（夢には潜在思考と顕在内容の区別はない，夢は「眠りの守り手」ではない，など），ユングの夢理論は神経科学的夢理論に親和性があるなどと論じている。

夢の量的研究全体においてまだ研究されていないトピックを挙げるときりがないが，本稿で扱った性差，年齢差，文化差との関連に限っていえば，時代的变化についての研究が乏しいことが挙げられるだろう。横断研究に基づいて推測された年齢差は時代差や世代差を含んでいるし，文化差と言いつつ時代も異なっている場合が結構ある。初期には報告されていた性差が近年は消えるなど時代的变化も報告されており，過去の研究が蓄積されてきた現段階においてなおさら，HVdCをはじめとする同じ指標で（多地点で）定点観測し続けることが重要である。

日本に目を向けると，初期にはいくつか重要な研究が行われていた（そのうちいくつかは有名な臨床家による研究であった）ものの，夢内容の量的研究が衰退してしまい，この40年ほどはHVdCを用いた基礎的研究が行われていない状況である。理由としては，HVdCのコーディング・ルールが日本語で手に入らないこと，HVdCの知見が夢解釈ひいては臨床実践に直接結びつくわけではないこと，文化差がさほど大きいわけではないこと（すなわち劇的な結果は期待できないこと）が分かってきたことなどが推測されるが，おそらく最も大きな理由は，正確なコーディングのスキルを習得するにはそれなりの訓練が必要であるからであろう。

日本においていま一度HVdCを用いた夢内容の量的研究を復興することで，現代日本人の夢を，

過去の日本人とも、現代の諸外国とも、比較することができ、応用的、臨床的な夢の研究の重要な基盤となるであろう。

引用文献

- Beaulieu-Prevost, D., & Zadra, A. (2017). Absorption, psychological boundaries and attitude towards dreams as correlates of dream recall: Two decades of research seen through a meta-analysis. *Journal of Sleep Research*, 16, 51-59.
- Bernstein, D. M., & Belicki, K. (1995). On the psychometric properties of retrospective dream content questionnaires. *Imagination, Cognition, and Personality*, 15, 351-364.
- Blagrove, M., & Pace-Schott, E. F. (2010). Trait and neurobiological correlates of individual differences in dream recall and dream content. *International Review of Neurobiology*, 92, 155-180.
- Brenneis, C. (1975). Developmental aspects of aging in women: a comparative study of dreams. *Archives of General Psychiatry*, 32, 429-434.
- Cote, L., Lortie-Lussier, M., Roy, M.-J., & De Koninck, J. (1996). Continuity and change: The dreams of women throughout adulthood. *Dreaming*, 6, 187-199.
- Dale, A., Lortie-Lussier, M., & De Koninck, J. (2015). Ontogenetic patterns in the dreams of women across the lifespan. *Consciousness and Cognition*, 37, 214-224.
- Dale, A., Lortie-Lussier, M., & De Koninck, J. (2016). *Ontogenetic patterns in the dreams of men across the lifespan*. Department of Psychology, University of Ottawa.
- Domhoff, G. W. (1996). *Finding Meaning in Dreams: A Quantitative Approach*. Plenum Press. (Appendixのみ以下から入手可能 <https://link.springer.com/book/10.1007/978-1-4899-0298-6>)
- Domhoff, G. W. (2005). The Dreams of Men and Women: Patterns of Gender Similarity and Difference. Retrieved November 27, 2024 from: http://dreamresearch.net/Library/domhoff_2005c.html
- Domhoff, G. W. (2022) *The Neurocognitive Theory of Dreaming: The Where, How, When, What, and Why of Dreams*. The MIT Press.
- Domhoff, G. W. (2024). Measurement and statistical issues that need to be addressed in the study of dream content. http://dreamresearch.net/Library/domhoff_2024.html
- Domhoff, G. W. & Kamiya, J. (1964). Problems in dream content study with objective indicators: I. A comparison of home and laboratory dream reports. *Archives of General Psychiatry*, 11, 519-524.
- Domhoff, G. W. & Schneider, A. (2008). Similarities and differences in dream content at the cross-cultural, gender, and individual levels. *Consciousness and Cognition*, 17, 1257-1265.
- Domhoff, G. W., Meyer-Gomes, K., & Schredl, M. (2005-2006). Dreams as the expression of conceptions and concerns: A comparison of German and American college students. *Imagination, Cognition & Personality*, 25, 269-282.
- Dudley, L., & Fungaroli, J. (1987). The dreams of students in a women's college: Are they different? *ASD Newsletter*, 4(6), 6-7.
- Dudley, L., & Swank, M. (1990). A comparison of the dreams of college women in 1950 and 1990. *ASD Newsletter*, 7, 3.
- Fogli, A., Maria Aiello, L., & Quercia, D. (2020). Our dreams, our selves: Automatic analysis of dream reports. *Royal Society Open Science*, 7(8), 1-18.
- Foulkes, D. (1999). *Children's dreaming and the development of consciousness*. Harvard University Press.

- Griffith, R. M., Miyagi, O., & Tago, A. (1958). The universality of typical dreams: Japanese vs. Americans. *American Anthropologist*, 60(6), 1173-1179.
- Hall, C., & Van de Castle, R. (1966). *The content analysis of dreams*. Appleton-Century-Crofts.
- Hall, C., & Domhoff, G. W. (1963). Aggression in dreams. *International Journal of Social Psychiatry*, 9, 259-267.
- Hall, C., & Domhoff, G. W. (1964). Friendliness in dreams. *Journal of Social Psychology*, 62, 309-314.
- Hall, C., Domhoff, G. W., Blick, K., & Weesner, K. (1982). The dreams of college men and women in 1950 and 1980: A comparison of dream contents and sex differences. *Sleep*, 5, 188-194.
- Hartmann, E., Elkin, R., & Garg, M. (1991). Personality and dreaming: The dreams of people with very thick or very thin boundaries. *Dreaming*, 1, 311-324.
- 河合 隼雄 (1975). 夢内容に関する数量的研究 日本心理学会第39回大会発表論文集, 494.
- 木村 晴子 (1919). 箱庭療法——基礎的研究と実践—— 創元社 (originally published in 1985)
- 稲浦 康稔・加藤 豊比古・前田 研史・鎌田 穰・弘田 洋二 (1983). 夢の研究 (その1) ——中学生の夢—— 大阪市立大学生生活科学部紀要, 30, 217-227.
- 稲浦 康稔・加藤 豊比古・前田 研史・弘田 洋二・鎌田 穰・山本 祐子 (1984). 夢の研究 (その2) ——小学生の夢—— 大阪市立大学生生活科学部紀要, 31, 237-245.
- Karagianni, M., Papadopoulou, A., Kallini, A., Dadatsi, A., Abatzoglou, G., & Zilikis, N. (2013). Dream content of Greek children and adolescents. *Dreaming*, 23(2), 91-96. <https://doi.org/10.1037/a0032238>
- 加藤 豊比古 (1983). 中学生の夢——ホール&ヴォン・ド・キャッスルの“内容分析法”による夢の発達の諸様相の分析—— 青少年問題研究, 32, 61-79.
- 川原井 詩乃 (2019). 夢と日常生活の関連——夢内容・精神的健康・パーソナリティに着目して—— 臨床発達心理学研究, 18, 3-14.
- 川野 冴佳・小川 景子 (2015). 夢内容と生理指標との関連——客観的な夢聴取質問紙の作成—— 睡眠医療, 1, 519.
- 北見 芳雄 (1957). 定型夢の研究 精神分析研究, 4(5-6), 1-12.
- 北見 芳雄 (1958). 定型夢の研究 (その二) ——男女大学生の夢を中心に—— 精神分析研究, 5(1), 4-9.
- 北見 芳雄 (1959). 定型夢の研究 (その三) 精神分析研究, 6(1), 1-7.
- 粉川 尚枝 (2020). 現代の老年期の人々の自己感と夢の構造の検討 箱庭療法学研究, 33(1), 3-12.
- 粉川 尚枝・松岡 利規・田中 康裕・河合 俊雄・畑中 千紘・梅村 高太郎 (2018) 夢見手の自己感の様相と夢の構造の関連 箱庭療法学研究, 31(2), 3-17
- Lortie-Lussier, M., Cote, L., & Vachon, J. (2000). The consistency and continuity hypotheses revisited through the dreams of women at two periods of their lives. *Dreaming*, 10, 67-76.
- Mathes, J., & Schredl, M. (2013). Gender differences in dream content: Are they related to personality? *International Journal of Dream Research*, 6(2), 104-109.
- McNamara, P., McLaren, D., & Durso, K. (2007). Representation of the self in REM and NREM dreams. *Dreaming*, 17, 113-126.
- 水本 正夫 (1962). 児童の夢内容 天理大学学報, 14(2) (通号39号), 271-290.
- 森田 修平・岡本 祐子・高野 恵代・池田 龍也 (2014). 自我機能類型と夢内容の探索的検討 広島大学心理学研究, 14, 39-57.
- 松本 京介 (2005). 青年における金縛りの心理学的意味——体験者がみた夢の主題—— 心の健康, 20(1), 57-69.
- Mazandarani, A. A., Aguilar-Vafaie, M. E., & Domhoff, G. W. (2013). Content analysis of Iranian college students' dreams: Comparison with American data. *Dreaming*, 23, 163-174.

- Nielsen, T. A., Zadra, A. L., Simard, V., Saucier, S., Stenstrom, P., Smith, C., & Kuiken, D. (2003). The typical dreams of Canadian university students. *Dreaming*, 13, 211-235. <https://doi.org/10.1023/B:DREM.00000003144.40929.0b>
- 岡田 斉 (2011). 「夢」の認知心理学 勁草書房
- 岡田 斉・松田 英子 (2019). 大学生を対象とした悪夢の内容別頻度と強度についての調査 人間科学研究, 40, 121-129. <https://ndlsearch.ndl.go.jp/books/R000000004-I029640342>
- 岡田 康伸 (1984). 箱庭療法の基礎 誠信書房
- Prasad, B. (1982). Content analysis of dreams of Indian and American college students: A cultural comparison. *Journal of Indian Psychology*, 4, 54-64.
- Roesler, C. (2018a). Dream content corresponds with dreamer's psychological problems and personality structure and with improvement in psychotherapy: A typology of dream patterns in dream series of patients in analytical psychotherapy. *Dreaming*, 28(4), 303-321. <https://doi.org/10.1037/drm0000092>
- Roesler, C. (2018b). Structural dream analysis: A narrative research method for investigating the meaning of dream series in analytical psychotherapies. *International Journal of Dream Research*, 11(1), 21-29. <https://doi.org/10.11588/ijodr.2018.1.41330>
- Roesler, C. (2020). The structural approach to the empirical investigation of the meaning of dreams: Findings from the research project "Structural Dream Analysis." *International Journal of Dream Research*, 13(1), 46-55. <https://doi.org/10.11588/ijodr.2020.1.67600>
- Roesler C. (2023). Dream interpretation and empirical dream research: An overview of research findings and their connections with psychoanalytic dream theories. *The International Journal of Psychoanalysis*, 104(2), 301-330. <https://doi.org/10.1080/00207578.2023.2184268>
- Roesler, C., Konakawa, H., & Tanaka, Y. (2021). Differences in dream content and structure between Japanese and Western dreams. *International Journal of Dream Research*, 14(2), 195-201. <https://doi.org/10.11588/ijodr.2021.2.76966>
- Schneider, D. (1969). The dream life of the Yir Yiront. In D. Schneider & L. Sharp (Eds.), *The dream life of a primitive people: the dreams of the Yir Yoront of Australia* (pp. 12-56). American Anthropological Association.
- Schneider, A., & Domhoff, G. W. (2024a). Normative Tables for the Hall/Van de Castle Coding System. Retrieved November 26, 2024 from <https://dreams.ucsc.edu/Norms/>
- Schneider, A., & Domhoff, G. W. (2024b). The Quantitative Study of Dreams. Retrieved November 26, 2024 from <https://dreams.ucsc.edu/Findings/cross-cultural.html>
- Schredl, M. (2018). *Researching Dreams: The Fundamentals*. Palgrave Macmillan.
- Schredl, M., Petra, C., Bishop, A., Golitz, E., & Buschtöns, D. (2003). Content analysis of German students' dreams: Comparison to American findings. *Dreaming*, 13, 237-243.
- Schredl, M., Struck, V. S., Schwert, C., Blei, M., Henley-Einion, J., Blagrove, M. (2019). Gender differences in the dream content of children and adolescents: The UK library study. *The American Journal of Psychology*, 132(3), 315-324. <https://doi.org/10.5406/amerjpsyc.132.3.0315>
- 関根 剛・小川 捷之 (1984). 夢内容の発達差・性差に関する研究(1) 横浜国立大学保健管理センター年報, 5, 25-45.
- 関根 剛・小川 捷之 (1985). 夢内容の発達差・性差に関する研究(2) 横浜国立大学保健管理センター年報, 6, 23-38.
- Sikka, P., Feilhauer, D., Valli, K., & Revonsuo, A. (2017). How you measure is what you get: Differences in self-and external ratings of emotional experiences in home dreams. *American Journal of Psychology*,

130(3), 501-515.

- Soper, B., Milford, G. E., & Rosenthal, G. T. (1994). Dream perspective: A research note. *Journal of Mental Imagery*, 18, 181-182.
- Strauch, I. (2003). Traume im Alter (Dreams in old age). In B. Boothe & B. Ugolini (Eds.), *Lebenshorizont Alter* (Life horizons of the elderly) (pp. 171-187). Hochschulverlag AG an der ETH Zurich.
- Strauch, I. (2014). *The most recent dreams of elderly men and women*. Department of Psychology, University of Zurich.
- Strauch, I., & Meier, B. (1996). *In search of dreams: Results of experimental dream research*. State University of New York Press.
- 鎌 幹八郎・平野 潔 (1985). 夢の主題に関する調査研究——性差・年齢差についての検討—— 広島大学教育学部紀要第1部, 33, 149-158.
- 鎌 幹八郎・平野 潔 (1986). 夢の主題に関する調査研究 (第2報) ——P. I. L. 得点との関連の検討—— 広島大学教育学部紀要第1部, 34, 193-203.
- Tazuke, K. (2021). Dream structure characteristics of modern Japanese people: A focus on differences with age. *Archives of Sandplay Therapy*, 34(2), 41-50. https://doi.org/10.11377/sandplay.34.2_41
- 田附 紘平・東森 茉衣子・武 蒼一郎 (2024). 現代日本人における夢の内容の様相と個人差 ——年齢差, 性差および人格特性との関連に着目して—— 日本箱庭療法学会第37回大会発表論文集, 110-111.
- Tonay, V. (1990/1991). California women and their dreams: A historical and sub-cultural comparison of dream content. *Imagination, Cognition, and Personality*, 10, 83-97.
- Underwood, M. (2003). *Social aggression among girls*. New York: Guilford.
- Weisz, R., & Foulkes, D. (1970). Home and laboratory dreams collected under uniform sampling conditions. *Psychophysiology*, 6, 588-596.
- Wood, J. M., & Bootzin, R. R. (1990). The prevalence of nightmares and their independence from anxiety. *Journal of Abnormal Psychology*, 99, 64-68.
- 山中 忠茂・森田 雄介・松本 淳治 (1981a). REM睡眠期覚醒法による大学生の夢内容の分析-1 ——下宿における夢—— 四国医学雑誌, 37(1), 61-68.
- 山中 忠茂・森田 雄介・松本 淳治 (1981b). REM睡眠期覚醒法による大学生の夢内容の分析-2 ——実験室における夢—— 四国医学雑誌, 37(4), 572-585.
- Yamanaka, T., Morita, Y., & Matsumoto, J. (1982). Analysis of the dream contents in Japanese college students by REMP-awakening technique. *Psychiatry and Clinical Neurosciences*, 36(1), 33-52. <https://doi.org/10.1111/j.1440-1819.1982.tb00254.x>
- Yoshioka, Y. (2023). Cultural differences in dream emotions between Japanese and Chinese college students. *International Journal of Dream Research*, 16(1), 81-90.
- Yoshioka, Y. (2024). Emotional characteristics of dreams among Japanese youths, adults, and the elderly. *Psychologia*, 66, 87-107. <https://doi.org/10.2117/psysoc.2022-A205>
- Zadra, A. & Domhoff, W. G. (2011). Dream content: Quantitative findings. In: M. Kryger, N. Roth, & W. C. Dement (Eds.), *Principles and Practice of Sleep Medicine, 5th Edition* (pp. 585-594). W.B. Saunders.
- Zadra, A. & Domhoff, W. G. (2021). Dream content: Quantitative findings. In: M. Kryger, N. Roth, & W. C. Dement (Eds.) *Principles and Practice of Sleep Medicine, 7th Edition*. W.B. Saunders.
- Zadra, A., & Donderi, D. C. (2000). Nightmares and bad dreams: their prevalence and relationship to well-being. *Journal of Abnormal Psychology*, 109, 273-281.
- Zadra, A. & Stickgold, R. (2021). *When Brains Dream: Exploring the Science and Mystery of Sleep*. W. W. Norton & Company. (A. ザドラ・R. スティックゴールド・藤井留美 (訳) (2021). 夢を見るとき脳

は ——睡眠と夢の謎に迫る科学—— 紀伊國屋書店)

Zepelin, H. (1980). Age differences in dreams: I. Men's dreams and thematic apperceptive fantasy. *International Journal of Aging and Human Development*, 12, 171-186.

Zepelin, H. (1981). Age differences in dreams: II. Distortion and other variables. *International Journal of Aging and Human Development*, 13, 37-41.